芹名の宴（うたげ）

著者略歴

本　　名　山本清治
昭和5年　栃木県大田原市生
昭和31年　早稲田大学独文科卒
「小説家」「関西文学」同人
現住所　川崎市多摩区宿河原1501元木方
TEL（044）922—7920

芦名の宴（うたげ）

©一九七四　検印廃止

昭和四十九年十一月一日　印刷
昭和四十九年十一月十日　発行
定価　九百五十円
著者　山本梧郎
発行者　横井晃
発行所　関西書院
大阪市生野区林寺二丁目二〇番一号
関西文学センター
電話（〇六）七一四—五九四六

1093－190019－0980　　印刷製本／いすず印刷KK

目次

沈みかけた家……5
振りむかぬ父……59
血縁の重み……93
癌……133
猿が島……151
芦名の宴（うたげ）……187
地獄谷……231
山本梧郎のこと　榛葉英治
あとがき

裝

幀

中

村

央

司

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芦名の宴（うたげ）

沈みかけた家

九月に入っていた。

昌子はギターを月賦で買ったらしい。たとえ月賦としても、よくそんな金があった、とおもう。音楽の趣味など昌子にはなかった。役所へ申しこんだ貸付金一万円が入るとすぐ、田舎の母にむしんしていた金が七千円送られてきたが、またたく間に消えてしまったはずである。履きつぶして薄くなっていた私の下駄が真二つに割れてしまっているが、それを買う金はない、といっていた。金がないのは私が使いすぎるからだ。昌子の話では、給料の半分も私がつかっているそうだ。

夜遅く帰り、家に近づくとオレンジ色に明るむ窓が植込の向こうに見える。夜気は肌寒く、風が枯れた音を立てている。その中にギターを爪びく音がかすかに流れてくる。その音色が、いかにも哀しい。金もないのにギターを買うとはもう破れかぶれなのか。昌子はそれを「わたしの恋人」だといっている。この数日、昌子は荒れない。このままこの調子がつづくのかもしれない、とすらおもわれる時がある。そのうち私は千代子と会わなくなるかもしれない。ギターをポツン、ポツンと爪びく音の中に昌子の静かな諦念がきこえるようだ。

そんなある日、私は千代子と二科展を見に行った。それから銀座のてんぷら屋へ誘われ、軽く酔っ

たところで湯島の旅館へ入った。千代子は私を疲れさせる。ウィスキーのポケット瓶を私はベッドの上でラッパ呑みし、千代子にも口移しをする。千代子は貪婪に長い愉楽を得ようとするからベッドワインは不可欠なのだ。

その夜帰宅して床へ入り、うとうとしたころ目がさめた。

「眠らせるもんか」

昌子は私を睨みつけ腕を振り上げながら叫んでいた。私はぞーっとして昌子の振り上げた手先を見た。帰宅したとき寝床のわきのテーブルの上に梨とナイフがおいてあった。こんなところにナイフを置いとくのは危い、そうおもった記憶がよみがえったからだ。しかし、昌子の手は何も握っていなかった。

「これは何よ。こんなことしてきて、嘘ばっかりいってる」

昌子は片手に二科展の入場券を二枚持って私の前にヒラヒラさせた。こういうものをズボンのポケットに入れたままにしておいたのは私の不注意だった。たかが絵を見に行ったくらい、なんだ、とかくなる上はひらきなおって叫ぼうとしたが、さすがに声は出なかった。弁解できない私の沈黙のせいか、昌子はふいに立ち上って服を着始めた。

「こんな男と一緒にいられるもんですか。きたならしい。不潔だ」

昌子は服を着ると、寝息を立てて眠っている初男を起こそうとしている。子供をつれてどこへ行こうとしているのか。タンスの上の目覚時計を見ると午前二時になるところだ。

「今夜だけはここにいろ、いてくれ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「かまわないで」
「どこへ行くんだ」
「どこでもいいじゃないの」
「こんな夜なかにどこへも行けないよ」
「どこへでも行けるわよ。歩けるところまで歩くのさ」
「馬鹿なことはよせ」
「あんたが馬鹿なことをしてきたんじゃないの」
「今夜はここにいてくれ。あした話そう」
「死んでもいいの。はなして。嘘の話なんか聞きたくない」
こんな会話を二時間ばかりもしていた。私は眠気と疲労で溜息をつくばかりである。初男は眠そうな顔でぼんやりとわれわれを見ていたが、そのうちに昌子の膝の上で眠った。
「初男がかわいそうだ。無茶なことはするな」
私はこんなことをいっていた。それは誰のせいだとはいわず、昌子はおもいなおしたように服を脱いで床へ入った。電灯を消そうとして立ち、時計を見るとすでに四時半であった。それでも朝は早く目がさめた。睡眠不足と疲労で生きた心地はないが、七時半に出勤のため家を出ようとする私に、
「さようなら」
昌子は床の中でいった。十時ごろにお敬から電話がかかってきた。
「昌子さんが来ているの。今二人で有子さんの家へ遊びに来てるんだけど、昌子さん、迎えに来ても

らいたいといってるわよ」
「それはすまない」
「とんでもない。さんざんお世話になったお礼の気持よ。どうするの、来る？」
「悪いけど、つれて来てくれないかな」
「いいわよ。もう少し遊んだら、それじゃつれてくわ」
　定時に退庁してまっすぐ帰宅すると、家はしまっていた。新聞受箱に朝夕刊が入ったままだ。牛乳が二本、ヨーグルトが一本、牛乳箱に入っている。家の中へ入り、台所を見ると、釜の米は炊くばかりになっているが、異臭を放っていた。腹がすいている。食事に行き、風呂に入ろうとおもうが下駄がない。私は脱いだばかりのズボンをはき、靴をはいて出た。風呂のあと、ラーメン屋へ入って餃子ライスを食べた。妻子と別れた独身男のように自分が見えた。毎日食堂へ入るような生活は大変だとおもう。昌子が帰らなかったらどうするか。離婚など考えてない以上、別居ということになるのか。しかし、家へ戻ってみると、昌子たちはいた。
「初男ちゃんが帰りたがったから」と昌子はいった。「一体どうしてくれんのよ。安井さんと別れんの、別れないの。返事ができないのね。お敬さんだって、別れるべきだっていってるわよ。一体どうなの？」
「そんなにおれを追及してどうしようというんだ」と私は大きく出た。「話をするなら、その目的を決めてかかろう。一体あんたはおれをこの家から追い出したいのか。それともなんとか親子三人で暮したいのか。どっちだ？」

そして私はしらを切る。
「安井女史と別れろというが、〝別れる〟ほど関係は深くない。彼女は雑誌の準同人だ。読書会の一員でもある。お敬や有子女史と同じじゃないか。それをつきあうな、というほど、女房の権力は強いのか。冗談じゃない。問題は一つだ」と私は別のことをいい出した。「あんたには被害妄想か被虐性神経症の傾向がある。今にはじまったことではないよ。包丁で指を切ったぐらいで大騒ぎをしたし、風邪をひいただけなのに肋間神経痛だなどといっておふくろに笑われたことがあったろう。だからおれの帰りが遅いと、浮気してきたように妄想する。そうしてすぐ死ぬといい、家を出るという。すべてあんたは負の方へうごこうとする。自分を殺す方向へうごいて、自己を逆説的に主張する。これまであんたには何の主張もなかった。おれに命ぜられれば動いた。だが、嫉妬だけは別のようだ。嫉妬を殺すことができないので、体もろとも殺す方向へうごこうとする。そういう異常神経のあるうちは、問題は解決しない」
私の詭弁の前で、昌子はいう言葉がなかった。いつの間にかウィスキーの酔いが体の中をかけめぐっている。
「さあ寝よう」
いって私は床を敷き、眠っている初男のわきへ行った。初男をじっと見つめる。喫茶店で五時間も遊ばされたり、知らないおねえさんの家で一日過ごさせられたりした初男を哀れにおもう。詭弁を弄した自己嫌悪がアルコールと共に体の中をかけめぐる。
「初男ちゃん、ごめんね」

と昌子もいってそばへ来た。それから私と初男の間へ身を横たえた。私はその昌子を背中から抱いた。昌子は性交を愛情の表現だとおもっている。それを逆手に利用しようという下心が私に起こったのだ。昌子は何もいわず、丸太棒のようにされるままになっている。スタンドの電灯を弱に切りかえるとすぐ、私の顔が昌子の茂みの方へ行こうとした。千代子との性交の習慣が身についたのか。

「消して……」

いいながら昌子は体をねじって背を向けた。しかし、すぐ私の体でおぼれた。

「あんたがいると、どうしてもわたしは乱れるから」翌朝、昌子はいった。「いっそのこと離れて暮していた方がいいとおもうわ。一緒に暮したいけど、安井さんとつき合うなら、別れていた方がいいもの。別れていて、そのまま冷えきってしまったら、離婚、するさ」それから語調を変えていった。

「ね、こんなことといわれて嬉しいでしょう。わたしは出て行くから、いい人におもう存分やさしくしたらいいわ。時々初男の顔を見に来てもいいのよ。嬉しいでしょ。本望でしょ」

しばらくの間、私は笑ってとり合わないでいたが、やがて冗談のようにいった。

「そうだ、名案だ。仕事部屋の一つも借りたいとおもっていたんだ。何しろこの家ときたら、托児所みたいなもんだからな。おれに必要なのは、明窓浄机だ」

「ちえっ、ああいうことをいう」と昌子はあきれたようにいった。「あんたはここにいるのよ。わたしが出ていって、日雇いでも何でもして暮すからいいのよ」

「空想的なこというねえ」

私は出勤のため家を出た。昌子が別居をいい出したのは半ば本心だとおもう。私への愛憎の念に苦

しむ自分から解放されたいとおもう部分だけ本心だろう。しかし、より肝心なことは、別居の方へ私の心がうごいたことだ。冗談のようにいったが、この心のうごきは次第にふくれ上がってきたのだ。私は道を歩きながら、遠い空を眺め、どこかの空の下に私の「個室」を想い描いていたのである。しかし、昌子のいう別居を空想的だといったが、私が家を出ることも空想的だとおもわざるを得なかった。今、四畳半の部屋を借りるのにも三万円ぐらい用意する必要があるときいている。それは役所から借りるとしても、その後二つの家庭を維持してゆくことは不可能なことだ。一つの家庭でさえ維持できず、借金したり親の援助を受けている現在である。私が別居すれば、当然千代子も介入してくる。ややこしい問題となる。私の空想はここでピリオドを打った。しかし、妻子との家庭を是が非でも守ろうという意志が私にないことに気づいて軽い驚きを覚えた。毎夜のように眠らせない昌子への嫌悪がおもい出されて腹が立っている。昌子が家を出たいというなら、こちらが出たいくらいだ、と眠い目を閉じながら電車にゆられていた。

二時ごろ昌子から電話がかかってきた。

「今、安井さんに電話して、プリンスで会うことにしたわ。こんなことをして悪かったかしら」

と昌子は落ちついた声でいった。ああ、また昌子は自分の墓穴をみずから掘ろうとしている。きながら私はおもったが、

「大賛成だよ」

わざと陽気に笑っていったのはいつもの偽装か。

「笑ってる場合じゃないじゃないの。別れるか、別れないかの瀬戸際なのよ。わたしは一度、安井さ

んと会ってみたかったの。それから今夜、お敬さんの家へ行くといってたけれど、何の用事なの？」
「きょう、雑誌が出るんだ」
「それならわたしも行っていいかしら」
「いいけど、子供のために早く帰った方がいいんじゃないかな」
「わたしは行くわ」
電話が切れた。昌子の口調は終始荒れてはいなかったが、相当の覚悟が感じられる。私はいくらか興奮していた。それを早く鎮めたいとおもううちに千代子から電話がかかってきた。
「今、奥さまからお電話がありましたわ」
「きいたよ」
「開口一番、どういう関係ですかといわれてびっくりしちゃったわ。それから、妻の不安をあなたは考えたことがありますかとおっしゃったわ。今は全身から力が抜けてしまったような気持だわ。もうお仕事どころではなくて、喫茶店にいるのよ」
「すぐ行くよ」
と私はいっていた。
「新宿がいいわ、いつものところで」
休暇をとって行く途中、私は舞台が大きくまわるのを感じた。新局面がひらけ、昌子はさらに不利になるだろうとおもう。
千代子は先に来ていた。波打つ長い髪で横顔を半ばかくし、煙草を吸っているが、灰皿にはすでに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com